

ナゴヤ子ども応援会議議事録

日時：平成30年2月9日

16時30分～17時30分

場所：市役所本庁舎2階 特別会議室

(事務局)

それでは、会議に先立ちまして、事務局からご報告とお願いがございます。本日の会議の出席者の紹介につきましては、お手元の名簿をもって代えさせていただきます。なお、野田委員、小嶋委員におかれましては所用により欠席でございます。まず、本日の会議におきましては、会議要綱第5条に基づく関係者として、伊東副市長、廣澤副市長及び金田教育次長以下、教育委員会事務局関係職員が同席しております。最後に、本日の会議予定は、全体で1時間程度、17時30分終了予定としておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、開会のあいさつを含めまして、河村市長より進行をお願いいたします。

(河村たかし名古屋市長)

はい、それでは、ご苦勞様でございます。別に挨拶しての形式的な会議ではありませんので。僕の今の問題点としますと、今度の予算でもそうですけど、やはり子どもさんと、特におっかさんですね、いつも言っているけど。親の抱える子どもさんの将来に対する不安ですわ、端的に言えば。うちの子の成績が伸びんとか、発達障害があるからとか、発達障害の中にアスペルガーも入りますけれど、そういうことでちゃんと生きていけるのだろうか。そういう悩みが大変強く、全国的に見とっても、いじめの事だけは法律が出来たからやるんですよ。僕によく聞いてこられるのも、今年に入ってからのご不幸についても、「いじめはありましたか」と、そればっか、くるわけですよ。それはそれで大変大きな問題ですよ。本当は問題なんだけど、そうじゃないんだよ、問題は。もっとできることが実はあるんじゃないかと、市として。というのが私の問題点の根本的な問題で、それに対して今までのやり方が十分に機能しているのか

ということですね。文科省のチーム学校という考え方が名古屋がやっていることと非常に似ているんですけど、分業だと言って全く仕事を分けてしまうわけではない。基本的に専門家により、やっていくということがこの名古屋で本当に出来ているのだろうか、ということを非常に疑問視しております。結論から言うと、教育委員会制度がありますので、教育委員会で「従来型ではいかんぞ。」ということを議決して欲しい。それで新しい挑戦をしていくと。この前ちょっと聞いたところでは、例えば転校してきた子どもだとか、親が離婚した子どもは、それだけでリスクが高いということで、グループカウンセリングじゃないけど、ようけの人が集まって、人生息詰まらんように、親も息詰まらんように、みんなで子どもの人生を応援していく仕組みが取られていると聞いております。これは外国の話だけれど、そういうことをやっていく必要があるのではないかと、僕は思います。だから、そこら辺のとこの問題意識をちゃんと持っていて。内申点だってそうですよ。繰り返しますが、5年になる。中学生が亡くなっちゃった時に、その理由の中に「忘れ物が多いことがあって、それが内申点に響くことで苦にして」ということは、はっきり第三者委員会が書いております。それに対して4年、5年になるけど。何の回答も示されない。回答と言っても数学の授業じゃないんで、回答が物理的に出てくるものではないけど。しかし、提案があって、教育なら教育の方から、子ども青少年局の方から「こういうことしていったらどうだろう」、「これにはこういう課題があるよ」というのがあったかというのと、無しですよ。この5年間。これでは、税金を頂いている価値は無いと思っていまして、もう待った無しでやっていかないと、予算の方でもやっていきますけど、やっぱり教育は一応市長部局というか別になっているもので。ただし、繰り返しますが、なぜ別になっているかと言ったら、アメリカは選挙をやっているから。教育委員というのは、民主的な根拠を持っているので、だから別になっている。日本でも出来んことはないんだけど、日本は地方教育行政法で自治体に置くと決めてまったもので、ロサンゼルス教育委員会は市のひとつとしては大きいんですけど、国会議員の時に調べたら中学校のブロックに1つぐらいある。そうすると、選挙をやる場合できるんですよ、身近な人だから。聖域なんてありませんよ、言うておくけど。言いたくて言うわけではないけど、私は自分で中学校に行きまして、7

人ぐらいの教員、教員の補助をやっておられる方から話をしてきたら、マスコミがなんか批判しとったと、市長が行くのはおかしいって。それで、直接学者に電話したったら、何がおかしいんだって言っていた。あなた達が一人の中学生が死んだ全部責任をとれるのか、という話ですよ。おかしくないか、という話で。まあ、そこで子ども応援委員会に相談するときには教育委員会の許可を取るという状況になっただけという事が分かった。それは廃止されましたけれど、もっと早く、せつかく作ったやつですからね、子ども応援委員会。今もう100人になりますけど。そういうことがあって、やっぱり広く子どもの不幸ばかりでないけど、やっぱり「何が好きだと、あんた達は」とみんなで応援していくで立派になってちょーよと、子どもさん達に言うという事は、広く教育委員会の専権でないから。もし専権だというのであればやってくださいよ、本当に。やってもらわないかん。あんだだけ内申点で困るとる、なんとかしないかん、と、何の返事もない。なんなんだと、いったい。ということを深く感じておって、僕は従来型を脱皮する1つの大きな挑戦をやっていく、どこにも無いからこれをやったのは。この間も、船津さんが予算の時に、私はキャリアコンサルティングをやっているけど、小学生のキャリアか、アドバイザーか何かをやったことが無いと。それは無いですよ。日本中で無いんだもん。無いけど、やらないかんのですよ。だから、そういうことは挑戦していくことであって、こういうステップをとっていくんだということを挑戦していこうと、ぜひ教育委員会で議決して欲しい。日本で初めてのことだから。

内申点もやらないかんですよ。内申点。違和感があると言っていたけど。違和感があるって、学校のトイレを大綱に入れる方がよっぽど違和感がありますよ、私からすると。内申点の対策で言うと、内申点の作り方がどうのこうのという事も1つそうですけど。内申点がたまたまあまり良くなかった子どもさんがどうやって人生を生きていくのか、ということをフォローしてあげる体制を作る。例えば、法人会等でやりながら、キャリアカウンセラーの話になっていくけど、そういった所を作っていくことも内申書対策のどえりゃあ大きな柱なんです。まあ、色々な話が聞こえてくる場所がありますけれど、そういう大きい挑戦をしていこうじゃないかということが、今日の趣旨であります。嫌な人ははっきり言ってくださいよ、教育の方で。そんなことはできませんと。

従来のやり方でええんだというなら言ってくださいよ、堂々と。言ってもらわなかん、そんなもん。私は、教育委員会の仕組みを守ることではなくて、名古屋に住んでおられる子どもさんやおっかさんを守ることが仕事だから。少なくとも今までのを反省してもらわないかんよ。内申点について、4年前、5年前ですか、悩んだ中学生が命を落としたという。それをなんとかせないかんと言ったけど、なんの提案も無かった。まず、謝らなければだめですよ。謝らないところからでてこんですよ。なんのために第三者委員会をやっているんだ。担当者が変わっていますけど、そこがいかなのだわ。担当者が変わっちゃっているから、その時から、教育長。市長は変わっとらん。そういうことを踏まえてやってもらわないと、他の自治体がどうかは知りませんが、形式的にやるのはやめよみゃーと、ということですよ。

(小栗委員)

市長、今日も教育委員会をやってきてですね、とても我々は反省をしまして、今回も予算を色々つけて頂く中で、もちろん改善していこうと。正に市長がおっしゃった、今から教育長がたぶん説明をしていただけると思うんですけど、やっぱり幼いころから、やっぱり我々が本気になって相談してあげないと、これはいかんと。悩んでいると言って今回ハイパーQ Uを増やしたりとか、それからアンケートの回数を増やしたりとか、市長が始められたカウンセリングを拡充したり、施策をととても充実してきています。どうしても我々が気づかない点も、例えばこのキャリアも、小学校から、中学校から相談をしてあげることによって、もっともっと防げるんじゃないかと、今日も検討していましたので、そんな点を教育長が説明していただけるんじゃないかと。

(河村市長)

世間様のご理解を言いますと、教育委員会も、名古屋はこうやって自由にしゃべってくれる人ですけど、ほとんど校長会など、学校の関係者が完全に支配しちゃっている。ということで、そういうことは変えられないと、いう風に世間様は思っていますよ。だからそれを変えるのが、わしの仕事なんで。

(杉崎教育長)

今、どんどん変わりつつあるので。

(小栗委員)

校長会と我々の話し合いの場がありまして、実際我々は、接することが多いんです。でも、結構理解してもらっていると思いますよ。我々も色々と情熱を持って話をするんですけど、みなさん教育熱心だし、我々が違う視点からきちっと話をすれば、理解が深まると私は思っていますよ。

(河村市長)

理解が深まったって、何も実際、提案も無いし。4年、5年。全然、提案が無いんだもん。内申点問題だって、日本だけじゃないかもしれないけど、国連から3回も勧告を受けてね、too much stress だということをほったらかしでしょ、実際。だけど、教育委員会の仕組みの中で挑戦をしていこうじゃないかと、ということです。

(杉崎教育長)

これからご説明するのはそういう挑戦していこうとする中身になっていますので。4、5年の話は、申し訳ないと思っています。

議論が始まってしまったので、ここで説明させていただきます。

「子どもと親の総合支援」について、資料1に書いてありますけど、それに基づいてご説明いたします。本年1月22日にさまざまな悩みや心配を抱える子どもや、先ほど市長さんからありましたように母親ですね、親に寄り添い総合的に支援し、子どもの目の針路にとどまらず将来の針路を応援するために、課題を協議する「ナゴヤ子ども・親総合支援推進調整会議」が廣澤副市長をリーダー、伊東副市長をサブリーダーとして置かれました。

これまでも教育委員会では様々な施策をやってきましたけれども、この調整会議の発足を契機に、今後は、子ども青少年局や、健康福祉局、市民経済局などとともに、「子どもと親の総合支援」の充実に向けて取り組んでいかなければならないと決意した次第であります。

資料を見ていただきますと左上、「調整会議」で示された3つのミッションがございまして、そのうち教育委員会の役割は、ミッション1「子ども・若者の自立支援」の2つ目の柱「◎子どもの将来の針路を応援すること」でございます。

そこで、教育委員会は、この施策目標を達成するために「キャリア支援」を行う必要があるということで、施策を今回、30年度予算にも計上しているところでございます。

教育委員会でやる「キャリア支援」については、資料1の右上の囲みを見ていただきたいんですけど、個別の子どもの発達過程を見る「開発的支援」において、「移行」ですね。移行というのは、進級だとか、進学だとか、就職、子どもにとっては大きなライフイベントのことですけど、この移行を支援することであると考えています。

移行について、進級・進学・就職を例示させていただきましたけれども、学校や家庭など、子どもを取り巻く環境に何らかの変化、先ほど市長も言われましたが親の離婚ですとか、色んなことでございます。そういうようなこと、何らかの変化があること、すべてが移行にあたります。そして、移行のリスクをマネジメントすることで、子どもが「自分の好きなこと、やりたいことをする」「自分なりに幸せに生きることを探る」を応援することが移行の支援であると考えます。

(河村市長)

ほんだけど「進級、進学、就職」なんて、書かない方がいいんじゃないか。これがあると、直感的にまず「進路指導」ですよ。今までと変わっていない。ここがいかんと思いますよ。発達障害があった子なんかは、どんな職業がいいかと猛烈に教えこんだって、ちょっと違うんじゃないの。下書いてあることは、何かしらええことが書いてあるけど、学校の先生は今までの型どおりにいくのではないですか。ほんだって、学校の先生もトレーニングせないかんのでしょ。ちょっと違うと思いますよ。

(杉崎教育長)

自分の好きなこと、やりたいこと、幸せに生きることを探っていく、応援していくことが、移行の支援です。

(河村市長)

やりたいことをするというこも、ちょっと誤解を受けるよね。外に出た時に。「わがままに生きる」ととれちゃう。ここらの所を一遍、校長会も含めて議論せないかんですよ。この了解を取っていかないと。何を応援していくのだと。

(杉崎教育長)

キャリア支援の定義をきちっと固めていきます。

(河村市長)

そういうことを固めないかんと思いますよ。議論しないと。今まではどういう方針でやっていたとか。私たちの目指すものは一体何なんだろうかと。それは出来るのか、出来んのかと。どういう困難があるのかということ。そこんところから一遍考えてみる必要があると思いますよ、私は。どういう人生の生き方がええかと。こういうことが好きなんで、という話でしょ、要するに。

(杉崎教育長)

その子、その子に合った人生の生き方を。

(河村市長)

そうそう、みんなで応援してあげるよと。

(杉崎教育長)

そういうことです。そういうものがキャリア支援だということです。

(河村市長)

そう思いますけどね。就労支援とは違うよと。進学支援と進路指導も大事ですよ。これはぜひ、しっかりやってもらわないかんけど。

(杉崎教育長)

子どもとしては進級したり、進学というのは大切なので、これも支援です。

(小栗委員)

人生そのものを応援するとか、そういう意味ですよ。

(河村市長)

そういうことです。子どもに合わせてね。子どもさんに。あなたに合わせてということだと思いますけどね。

(杉崎教育長)

具体的に30年度からは、今申し上げた子どもさんに合わせて人生の生き方を支援するというキャリア支援をやっていくために、新たに「キャリア支援モデル事業」をやっていこうと思っています。

まず「移行の支援」として、左側の緑色の所、小・中学校の支援ですけれども、中学校に配置されております子ども応援委員会のスクールカウンセラーと、市内16校の小学校が連携し、一人の子どもの発達の様子を9年間、途切れなく見守る取り組みを実施します。

(河村市長)

今の子ども応援委員会のメンバー忙しいと聞いておりますので、だからそんな中でやってもらうのはいいけれど、やっぱり大変だけど、作っていかないかな。例えて言えば、今3万人ぐらいおるキャリアコンサルタント。その人たちは小学校でやったことがないですけど、例えばそこに公募してみると。そうすると、学校の教師もおるかも知れないね、3万人もおると。この間聞いた話では、ちょうどアメリカンスクールなんかは、アメリカ型のやつもやっているだ

ろうで、そこと交流せなあかん。まあ、トレーニングせないかんね、3か月ぐらい。やりながら1年ぐらいかかって、ちょっと名古屋市立大学もそういうことが出てくるかもだけど、そういうことをやっていくというチャレンジをしていきゃいいんじゃないかね。ここだと、子ども応援委員会のスクールカウンセラー以外の人が入らんというニュアンスになっとる。子ども応援委員会のスクールカウンセラーと、となっている。

子ども応援委員会を作る時も同じようなことがあったけど、臨床心理士さん、社会福祉士さんから始めていったんだけど、こちらだって、子ども応援委員会も大変忙しいと聞いているので、その中でやる人があってもいいけど、そうじゃない人でも。

(小栗委員)

限定する必要は無いという事ですよね。ここに書いてある人に。

(河村市長)

そういう意味ですよ。限定する必要は無いと、僕は思いますけれど。船津さんが言っていたように、教師がおる可能性があるんでしょ、3万人おれば学校の体験者が。その代り、トレーニングがいるけどね。

(杉崎教育長)

それで真ん中の所ですけど、高等学校の支援ということで、まず1つは、常勤のスクールカウンセラー1人を中央高校ですけど、初めて、配置するとともに、現在配置している非常勤のスクールカウンセラーの配置時間を増加するということがひとつ。もうひとつは、普通科高校、特別支援学校高等部において、新たにキャリア支援アドバイザーを配置していこうと考えています。また、商業・工業の専門高校、定時制高校には、従来から配置されていたキャリア支援アドバイザーの配置時間を拡充していくということが、高校でのキャリア支援モデル事業です。

(河村市長)

わしが言いたいのは、非常勤で、1時間に3人か4人相談が入ると言っていたがね。それだと、努力はされていると思うけど、無理じゃないですか。子どもや親に潜む非常に深い悲しみのことが分からんでしょ。非常勤であって、時間増だけで本当に話せるのって、ということをわしは聞いてみたいよ。分からんから。これは人任せにしません。自分で聞かなかん、ということなんです。それと、しょっちゅう他の局にもお願いしているんだけど、局長とかそういう人達は、全部が全部自分でやらんでもいいけど、組織だもんで。組織である程度やればいいけど。自分で関係者に直接電話するなり、会って、聞かないかんですよ。みんな部下にやらせると、だいたいそうなんだ。部下は、悪いけど、2、3年経つとそこにおらんのですよ。それで、新しいのが来て、やるわけです。すると従来とは違う提案なんかできんがね。それだで、教育委員の皆さん、それから局長なんかは、2兆6千万円の全予算やると大変だから。これだと言うやつはあるがね、これだと言うのが。これは、自分で考えないかん。これは自分で直接、やっぱり、おっかさんなり、子どもさんに直接会わないかん。そうすると分かってきますよ。色々な苦しみが。

この間の中央高校なんか、よく、そんな非常勤なんかでやっていますよね、よく考えてみたら。色々な課題が高校生にもあるから、だから突然にスクールカウンセラーとか、キャリアカウンセラーとか日本にないけど、それに準ずる者は当然おってね、年がら年中、やっぱり悲しみを聞いてみると、おっかさんを訪ねて行って悲しみを聞いて見ると。そんなことが無かったというのが、おかしいんじゃないかね。学校さえ用意しておけばええのかとなってしまう。

(杉崎教育長)

小学校は色々な課題を抱えた子もおるもんで、担任制にもなっていて、先生をちょっと多めに配置してありますけど、やっぱりそういうところは、市長の指摘のとおり手薄だったと思います。

(河村市長)

それだで、常勤の専門職の人がちゃんとおって、やらないと。

(杉崎教育長)

そうですね。

(小栗委員)

3万人の中からは可能なんですよ。今のお話で。もちろん可能なんですよ。さっき言った、河村市長がおっしゃった3万人ぐらいいて、その中で資格とかなんかがいるのか、いないのかだとか。まずは、そういう人達がいたほうがいいのか、実際そうですね、キャリアを相談する時。ただ、その人たちを配置するときに資格がいてね、その資格がいるから人数がなかなか限定されるとか、なかなか増えないじゃないですか。だから、例えば資格がいるのか、いないのか。もし資格がいなくても、まずはその人たちを配置したいんだったら、配置することから考えてみるとか、というところはどうか。

(伊東副市長)

今は教育委員会の方で予算の説明をしているんですけど、子ども青少年局の方で今、3万人を対象に頼む予算は考えておまして、今そこは、市長さんが言うように個人がいいのか、あるいはそういうことをやっている法人、コンサルタントをやっている法人、そういう所に委託して、その人たちが学校の方に行っていただくという、そういう方法もあるのではないかと。今これは、教育委員会の方の今までの拡充みたいな形の中で1人中央高校に配置するのですが、それとはまた別に、子ども青少年局の方の予算の中で、小学校・中学校・高校の中にそういったコンサルタントを活用していただくという予算は今回やっておまして、この方もそういうことがいいんじゃないかということはあると思います。

(小栗委員)

そうですね。今副市長がおっしゃったように、それを分けずに、協力して、ということですね。一緒になって考えていくということかと。

(伊東副市長)

それはあると思います。

(河村市長)

修正してくれたことなんだけれど、初め聞いた時は、そういうコンサルタントを学校の外に置くと言っていた。学校の外に置くって、そういう人達は常勤で、机が無いって、何をやるんだと。そういう信じれんような話になるんですよ。なので、教育委員会だって、チーム学校の思想じゃないけど、自分らでできんこともあるとはつきり言っているんでしょ、忙しくて。たっだら、「そういう人達も学校に来てくれ」と言わないかんのじゃないの、と思いますよ。これが、チーム学校で文科省が狙っていることだと思うよ。

(杉崎教育長)

そうですね。

(伊東副市長)

そこは、そういう考えもあると思います。

(杉崎教育長)

はい、最後右側の名市大との連携ですけれど、名市大と連携してですね、「なごや版キャリア支援」の構築に向けて日本や諸外国における現状調査、基本方針の作成などを作成してもらって、名市大で先生を雇ってですね、子ども応援委員会の職員に研修をやって、スクールカウンセラーがキャリアカウンセリングもやれるような形にしていこうと思います。

(河村市長)

ここも同じ問題なんですけれど、例えば子ども会なんか、みんな、おっかさんの力になると言っているわけですよ。6回研修をやりました。子ども会連合会。だから、そういう人達の中で、成人、まあ若い人達の中でもいいんだけど、1年コースとか色々あってですね、そういうものに入っていてもいいと思いますよ。

(杉崎教育長)

一回、市大とも相談して。

(河村市長)

高校まで全部で400校あるわけですよ、幼稚園まで入れると。こういうのを見ていると、どう見たって学校は自分の門扉を閉ざそうとしているととれちゃいますがね。常に、今までやってきた人、それも子ども応援委員会に限定してやっているでしょ。

(杉崎教育長)

研修の対象者は子ども応援委員会職員だけじゃなくてやと思います。

(河村市長)

「子ども応援委員会の職員に」と限定して書いてあるがや。

(小栗委員)

市長がおっしゃるように、色んな事由は入れるべきだと思うんですよ。今までは学校の先生たちの価値観が強くて、それで自分たちは良いと思っているんですけど、実際社会はすごく変わっているし、さっきおっしゃったように色んな人達が入ってきて、違う視点で相談してあげられるようになるといいですよ。それが、小学校、中学校の子どもの頃から人生がこうなるんだと、というように子ども応援委員会と一緒にやっていくようになっていくのが、僕は理想なんじゃないかと思っていますね。

(河村市長)

学校の教師の人たちもその方がいいんじゃないか。ええと思いますよ。

(杉崎教育長)

多忙化の解消にもなりますしね。

(河村市長)

多忙化解消にもなるし、もっと、一応専門家がおるもんだで、自分でもっと優しく接する、注目してみることができるようになると思います。

(杉崎教育長)

忙しくて先生がギリギリしていると、子どもたちも嫌になってくるといいますよ。先生たちも楽しそうにしていないと。

(河村市長)

悪いけど20代でそのまま教師になって、その人達に突然な、親と子の、本当の人に言えないような苦しみや悩みや、自殺してしまうような悩みを、自分で、相談相手になってくれと言ったって、無理ですわ。そもそも。やっぱり専門家の人達を要請しながら、力を借りながら、やっていかないとかなと思うよ。

(小栗委員)

校長会の先生たちは、さっきの話ですけれどね、例えばソーシャルワーカーとか入れた時に学校に行ってお話をした時、やっぱり違和感を持つ先生もいらっしやったんですね。自分たちと価値観が違うとか、自分たちと違う人が入ってきたとか。でも、そうじゃなくて、その校長会の人達も、逆に違和感であったり、自分たちと価値観が違う人達を本気になって取り入れていく。結果的に、校長会としてそれが子どものためになる、という風になっていくと、逆に我々も動かないといけないかもしれないですね。

(河村市長)

そうそう。いずれ、そういう風になると思いますので、なっちゃようよ。

(杉崎教育長)

そういう気持ちで今、全員やっていますよ。

(船津委員)

キャリア教育は、モデルがないとできなくて。ナゴヤ子ども応援大綱でも「大きくなったら何になるの？」というのがありますよね。モデルがないと、知らないとやりようが無いわけなんですよ。そうするとどういうものを見せるのかというときに、社会を出る前の学校に子どもがやってくるというのもありだと思っんですけど、それを全部先生がコーディネートするのかというと、今のお仕事がある中で大変だと思うんですよ。

(河村市長)

無理だろう。それは。

(船津委員)

それは、世の中の事に精通していて、子どもの発達も分かって、それをコーディネートできる人達が学校の中にいると、先生がこうしたいと言ったら、コーディネートされて、子どもの発達段階に合ったようなメニューが出来て、見守って、それで会ってみてどうだったということを、カウンセラーの方々が聞ける仕組みが出来たらいいなと思うので、それだったら各校に1人いる必要がなくて、地域に、その地域を回ってくださるような方がいれば、大人の都合を聞きながら、子どもの様子を見ながら。

(河村市長)

国会図書館から取り寄せた資料を見ると、アメリカの人ですけど、カリフォルニア州の生徒500人に1人、だいたい日本で言うところの学校に1人。名古屋は財政危機って、嘘で、こういう所にお金を使わなければ、何なんだったことですよ。納税者だって、そういうところだったら、本当に使って欲しい

と言うと思いますよ。名古屋市の納税者は。自信を持って。どうもこれを見てみると、やっぱりバリアーがあるように見える。学校側の特定の人しか入れない。非常勤ならいいと。そういう風に見えちゃう。

(小栗委員)

そんなことはないですよ、市長。

(河村市長)

それなら、小栗さんに頑張ってもらわないかん。やってもらわないかん。

(小栗委員)

あとは、この前もちっとお話したんですけど、実際にキャリアを相談する人が、いい意味ではあるんですけど、日本的な考え方があって、これだけグローバルゼーションになっている時にですね、実際のアメリカ人の優秀だと言われるトップの人を2、3人連れて来て、1回パイロットをやるべきなんですよ。日本のカウンセラー、日本人というのも、「こうあるべきだ」とある程度、日本文化の価値観が決まっちゃっている人達もいるかもしれない。その人たちが子どもに話しても、結局子どもも親もその範囲内でしか分からない。外国文化で、実際アメリカでカウンセリングをやって、日本との文化の違いを知っている人が実際に来て、通訳なんかも入れずに話して、その人たちが実際に接することによって、また何か違うものができるといいのではないかと、ちょっと相談させていただいている。日本人が日本人の価値観で動いてしまうことがあったりしてしまうと、実際に英語でしゃべって聞いて見たりとか、そこに通訳の人がいたりすると、そこで何か新しいものが生まれてくるのではないかと思う。

(河村市長)

アメリカの人が言っていたけど、アメリカンスクールにおった人で、今、子ども応援委員会のメンバーがおって、交流できますよと。日本語が出来る人もおるし、ということだった。

アメリカ型の個人個人を、一人一人を応援していくということをやっているらしいですよ。交流すればいいんじゃないかと。それか、5人か10人ぐらい校長でちょっと気の利いた人を紹介して欲しい。その方が早いですよ。校長先生は法律上も権限が大きくて、ある校長は非常にそういうことに積極的だと、従来型でない新たなやつをやっているという人がおったら、その人の所でモデル実施をやった方が早いですよ。

(小栗委員)

そうかもしれませんね。確かに。

(杉崎教育長)

紹介しますよ。

(河村市長)

だいぶ前から頼んでいるだろう。5人から10人ぐらい。10人ぐらいおるといいですよ。

(船津委員)

キャリアのことを一生懸命勉強している教員もいますよ。

(河村市長)

それだと従来型の仕組みの中で色々と言われても、「何言ってる」と言える人でないといかんよ。従来型が全部悪いと言わんけども、新しいチャレンジをしようじゃないかと。そういう校長先生じゃないといかんですよ。

(小栗委員)

どうですか、そういう校長先生は。

(河村市長)

学校に聞かないといけないけど。次長たちがおるところだから。

(梶田委員)

いますよね。

(河村市長)

おるのかそういう人は。学校に。

(金田次長)

紹介したい校長は、もちろんいますよ。また、一生懸命やろうとしている校長にひるませるようなことを言うということが、ちょっと分からなかったです。

(河村市長)

外部に置くとかね。キャリアカウンセラーを学校外に置くとか。それを学校が言ったかどうかは知りませんが、今までこういう提案が無かったということは、右へ倣えになっと思えますよ。専従が1人来て、学校の中に机1つを設けて、子ども応援委員会と一緒に良いんだけど、子どものキャリア支援をやりかけたというのが1校もないということは、これはたぶん構造としてそういうことを認めない風土があると思う。

(小栗委員)

金田次長がおっしゃるには、校長会も前向きに取り組むはずだと。

(金田次長)

そうです。

(河村市長)

校長会は、これまでのいわゆる進路指導も大事ですよ、いらないとは言っていない、大事ですよ。それ無しでは、むちゃくちゃになってしまう。もう1個、子どもさんに合わせた、あなたの人生を応援していくという人がおってもええ

と、そういうものを導入すべきだという風になるとは思っているからね。

(金田次長)

そういうテーマを持って自分の所の学校を運営している校長は5人、10人ではないです。

(河村市長)

それなら紹介してちょうな。その方が早いですよ。

(小栗委員)

パイロット的にその人達が進めていけばいいですよ。

(河村市長)

それだと早いですよ。こんなことでよ、私、嫌われるようなこと言いたくないですよ。疲れるで。そりゃあ積極的な人の所で、前向きに作っていった方が良いでしょう。そうすると、色々な課題が出てくるでよ。

(小栗委員)

それは金田次長、今の、校長先生の中で、今おっしゃったように、一生懸命やっていきたいという方は5人、10人はいらっしゃる。

(金田次長)

そうですね。ただ、今新しく出てきたキャリア支援という考え方でね、今まで学校運営やってきた人間が何人いるかは分からないので、今何人ということでは人数は言えないですけど、こういう事に関心を持って、それをテーマにして、これから先、学校運営をしていこうという校長は必ずいます。

(小栗委員)

そういう人に手を挙げていただくなり、我々からスタートしてパイロット的にやっていくことはいいんじゃないんですか。

(河村市長)

ええなあ、本当に。いかんぞ、本当にやらんと。

(金田次長)

キャリア支援というものを学校の運営の柱に据えて、やっていくということですね。

(河村市長)

柱がどうか知りませんが、こういう新しい、従来の進路指導とはちょっとまた違った、それはそれでやってくれればいいんだけど、まぜたらいかん。無しになったらえらいことになるんで。もうひとつ違う、子どもの全人間性をみんなで応援していくと、いうやり方を学校の中で取り入れていくと、そういう人を学校の中で受け入れると。学校で受け入れてくれなあかんよ。

(金田次長)

むしろ来ていただければありがたい。

(河村市長)

従来と違うやり方になるけど、ええかね。

(金田次長)

新しいやり方として受け入れればいいんです。

(杉崎教育長)

今、教育委員会としてはキャリア支援を名古屋市の教育委員会の重要施策として位置付けるようにしましたので、それは大丈夫です。この先、教育委員会の計画自体にキャリア支援を全面的に打ち出してありますから、あとはアクテ

ィブラーニングと言われている主体的で深い学びも当然やりますけど、そうやってグローバルにも対応できる子どもさんを育てていこうと思います。

その他にも教育が来年度から取り組むことを、太字で書いてある青色の所ですが、特にナゴヤ子ども応援委員会はクリーム色の所で、スクールソーシャルワーカーを来年度2人増員します。そういったことをやっていくということで、まとめてあります。

あと1つ、先ほども市長からも話があった内申書の件、4、5年全然やってくれんという話も当然申し訳なかったわけですけど、これについては1回、保護者と生徒に対して調査書、内申書の様式をきちんと示してそれを理解していただくのと、何で評価しているのか、何を評定しているのかをきちんと子どもさんと親御さんにも説明していこうと思います。もう1つですね、そうやって精神的な負担の軽減に努めたいということと、公立高等学校入学者選抜において学習の記録、評定を用いない選抜方法の創設の検討に入っておりますので、ご理解、ご承知おきいただきたい。

(河村市長)

そういえば体が不自由な子の体育の内申点が、若干ハンディキャップがあるから、低くなってしまうという話があった。努力というものはどうなる？

(杉崎教育長)

努力を評価します。単にタイムだけだと、全然勝てっこないので、色々と配慮しながら、その子の努力を評価する。

(河村市長)

そういう流れでいうと、熱田区のエデュセンターで200人か300人を呼ぶ表彰式に行きましたけれど。11月3日の教育委員会表彰。あれ、やめたらどうだ。もっと、色々なフレンドリーな事で評価して楽しくやるならいいけど、たぶんオール5で生徒会長なんじゃないの。

(杉崎教育長)

違いますよ。そういうことだけでなく、成績だけじゃない。

(河村市長)

一遍見せてくれ、全部。何人おるか分からんけど。何人かと言っているわけじゃないよ。主流の流れですよ、問題は。子どもさんを評価するのに優良だという子どもを、単に成績でやっているのかと。そういう風じゃないかと、思われるわけ。わしは優良児になったことは無いけど。

(杉崎教育長)

僕も無いです。

(小栗委員)

僕も無いです。

(河村市長)

非常に、時代的には、違和感がありますね。軍隊みたいにずらっと並べて。どこかに、こういう事は立派な事だと、みんな学校の廊下に貼ってくれるならいいけど。ああいうのはやめよまい。

(船津委員)

何かで表彰された人もあそこで表彰されたりしていますよ。

(杉崎教育長)

絵が全国でとか、一芸であつたり、スポーツで、吹奏楽でという子も表彰しています。

(河村市長)

そういうのでよくあるのが、1個の例外を用いて、あたかも全体の理由というのはよく使われる。本当に一人一人見せてもらわないかん。

(小栗委員)

やり方がちょっと堅苦しいし、もうちょっとせっかく表彰されるのであったら盛り上げるような形でできないかと。

(河村市長)

教育長や市長が出てきて偉そうにやるのでなくて、みんなで、学校の中で、コミュニティの中で、みんな立派だという雰囲気ならいいですよ。それならおおいに表彰すればいいですよ。軍隊でもあるまいし。

(杉崎教育長)

子どもをぜひという親御さんがいるのも事実というのもあります。

(河村市長)

そんな子を表彰するのに、教育長は立派な人間かということになる。

(杉崎教育長)

そんな立派じゃないです。役柄でやっているだけなんです。

(河村市長)

そうなるだろう。そういうことはやめよまいということになる。

(梶田委員)

もうちょっとわきあいあいとやれないかと思います。それと、なんで表彰されたかがみんなに分かるようにしてあげないと、市長がおっしゃる通り成績で選んでるのかという風な誤解を受けるのは、そういう風な気がしてしまう。もうちょっと、なんでこの子を表彰するのと、その表彰が遺産になると、こういう事で頑張れば表彰してもらえるんだ、人から認められるんだと思うことが、子どもの自己のね。

(杉崎教育長)

子どもの自己肯定感を高めるので。そういう所は良いことだと思います。

(河村市長)

どえりゃあ努力しているということでやっていくんだけど、そういうところへ表彰していく雰囲気ではないじゃないか。

(小栗委員)

流れはそうです。

(梶田委員)

私も嫌い。

(河村市長)

そうでしょう。教育長はそんなに立派かと。なんだと。市長も、お前なんだいうて。そういうもんですよ。

(杉崎教育長)

別に僕も偉そうにしたい訳ではなくて、そういう役職についてやっている訳でありまして。

(小栗委員)

変えればいいということですね。

(伊東副市長)

認められるということは大切だと思うんですよ。

(杉崎教育長)

それは自己肯定感を高めるので。

(河村市長)

ああいうところにも表れているぞということです。ということだと、思いますよ。ちょっと馴染んでいいから、成績も悪い、ちょっと発達障害があるか分らんけど、この人はあれは別格だと、はじめからね。学校はああいう所でやっていると。俺らはだめだと。そうなっちゃいますよ。そうなります。それは、いかん。

(杉崎教育長)

来年度、検討します。

(河村市長)

なんべんも言っているけど。

(小栗委員)

チャレンジですよ。

(河村市長)

そうになったら楽しいですよ。ガラッと変わります。雰囲気が。

廣澤副市長も座長なんで、一言ぐらいしゃべったらどうですか。

(廣澤副市長)

今回、座長に任命されてますね、2月の予算が終わってから本格的になると思いますが、本当に市長のご意向を受けまして、一人でも、とにかく、不幸が、お子さんと親御さんを救うというのは、不退転の決意で行って行こうと考えております。これは本当に部局横断的ではございますけれど、特に教育に関わる部分は大きいものですから、ぜひご協力いただきたいと思います。本当に斬新な発想でいかないと、なかなか長い歴史を持っている教育理念にですね、ある意味新しい風を吹かすのは難しいので、多少の軋轢はものともせず、やっていきたいと思っていますので、ご理解いただきたい。よろしくお願いします。

(伊東副市長)

今日は、良かったです。私は所管として教育とか、子ども青少年局や健康福祉局をやっているのですが、やっぱりちょっと壁を感じることもあったんですね。職員同士も、たぶん市長が言うのは、局長達は分かっているんですけど、おそらく。下の方へいくとそういう風に分かり合えていない。なので、いつも説明に来たりする時には、そういうことを言うんです。ちょっとずつ子どもたち、当事者の方達がどう思っているか、どうしても役所は供給側の視点に立ちがちで、それは供給している方が疲弊してしまうと、主役の子どもたちも疲弊してしまうという暗黙のうちにやっていると思うんですけど、やっぱり子どもたちがどう思うというか、アウトリーチをするということが良いということと、恐らく行ってもなかなか会ってくれない方達でもひょっとしたら会うということもあるんじゃないかなと思ったりもするんですけど。そういうことで、私も今年の1年の自分のあれが、発見・挑戦・承認なんです。色々な事を、小さな事でも発見して、1つずつ挑戦して、認める、さっき言った承認。認めてもらえたら、うれしいんですよ。自分が生きててよかったな、みたいな。ありますよね。それから、市長さんがよく言われている、「自分たちがそういう人たちの声を聴く」ということはやっていきたいと思っています。そこら辺はやっぱり民間から来ていらっしゃる廣澤副市長さんは早いので、見習っていかなければならないと思ったり、そこんところだけはお願いしちゃおうかなと思ったり、お互いに足りない所は補いながらと思っていますので、今日はありがとうございました。

(河村市長)

教育委員の皆さんもせっかくだから、一言ずつ。せっかくだから。梶田委員から。

(梶田委員)

私も今日の市長のお話で、やっぱりこういう文言1つ1つの端々でも、今までの慣習というかそういったものは出るし、たぶん内心にそういうものがあるのかなと。先ほど教育委員会に出ていても、やっぱり改革には時間がかかるイ

メージを持っている。だから、余計に時間をかけれるということが、すごく気持ちの上で強い決意が出来ない部分なのかなという事を、今日改めて感じさせてもらいましたので、委員としてそういった所を事務局の方に訴えながら、ぜひ子どもたちを一人でも救えるような努力をしていきたいと思います。ありがとうございました。

(河村市長)

では、船津さん。

(船津委員)

キャリア支援は取り掛かったら絶対に途中では辞めてはいけない。この子たちが大人になって、その大人が子どもを教育していくという循環になるので、始める時がすごく大変でも、取り掛かったら中途半端に絶対に出来ないものだと思っているので、先ほど市長がおっしゃっていたかもしれないけど、チームでやるという事がとても大事で、お互いの立場を付度してはいけないと思います。市長がおっしゃったみたいに、子どもの視点に立って、子どもの目線で考えたら、大人が誰かはあまり関係ない話だと思いますので。それぞれの専門分野があって、業務があって、それがチームになっていく。私は「連携」という言葉を使いたくなくて、「共動」だと思っているので、「共に動く」と思っているので、そういう形でやっていきたいと思ったのと、今日、教育委員会があって名古屋市教育振興基本計画、そういう固い言葉もなかなか難しいと思うんですけど、その重点戦略のキーワードに「主体的・対話的・深い学び」というのがあったんですけども、キャリア支援。子どもたちのためだけじゃなくて、お互いがやっぱり主体的で、当事者であって、対話して揉めてもその先を超えて行って、そこに新しい理解があって、それぞれのキャリアのことも考えていく。大人がそこを楽しくやっていれば、子どもは一生懸命、長く大人の背中を見て回れたらいいかなと思いますし、お父さんお母さんが幸せで仕事ができれば、家庭の幸せになっていくと思いますので、なんか子どもたちのためだけけど、それは自分たちのためだという奉仕者の気持ちが、やっぱりそれぞれ関わる方々にとっても大事だと思うので、それがもしも専門家としてで

きるのであれば、キャリアカウンセラーというのは非常に大事な、支援の推進者だと思います。子どもだけでなく、ひょっとしたらお父さん、お母さんのキャリア支援もすることになるんじゃないかなと。

(河村市長)

そうなっていくわな。次は、小栗さん。

(小栗委員)

はい。まずもって、今日はありがとうございました。先ほど両副市長がお話されて、廣澤副市長がおっしゃっていた「スピード」が、僕ら企業人にとって最も重要な事だと思っています。今日、市長からお話をさせていただいて、キャリア、これは本当に価値観が変わってきているという事と、それから冒頭市長もおっしゃったんですけど、これだけ我々が思っているにも残念ながら不幸な事件が起こったりしてしまって、最大限の努力はしていると思います。そこにいく前に、子ども応援委員会の皆様とか教育委員会が一緒になってやっぱりやって、一方で本市がリーダーシップをとって行けるようになっていくということ。それから、日本という国そのものが価値観が、どうもこのグローバリゼーションの中で遅れているところがあったりして、それが教えている先生自身の価値観みたいなものもやっぱり変えていかなければいけない。船津先生がおっしゃったように、それも親も含めて変えていかなければいけないという中で、ぜひ先ほど金田次長もおっしゃったように、校長会の人たちも本当に一体的になって協力してやっていただける人達を早く我々が見つけて進めて行けるといいなと思って、最終的にはやっぱりお子さんが夢を描けたりとか、明るい未来に向かえるようにできたらいいなと思いました。本当にありがとうございました。

(河村市長)

教育長。

(杉崎教育長)

今、3人がおっしゃったこととほとんど一緒なんですけれど、自分が教育長になる時に確か議場でも言ったんですけど、「子どもも含めて市民みなさんの人生を応援する委員会であるべきだ」と僕が言った覚えがあって、人生を応援というのはその時から自分はそうっておって、まさにキャリアというのがそういうことだと思っております。先ほども話がありましたけれど、子ども1人1人の個性を大切に、社会で活躍できる力を育成しなければ、やっぱりいかんと思います。別にマルペケのマルが多い子を育てても社会に出たときに本当に役に立たないという事もあるので、やっぱり子どもの個性を大事にして社会で活躍できるような力を育成していくことが、究極の教育の目的だと思っていますので、教育委員一同、一生懸命今後もやっていきますので、引き続きよろしく願いいたします。

(河村市長)

それじゃあ、まあ、最後じゃないですけども、僕が聞いているところで、自殺というのも超悲劇ですけど、それに至らんどroppアウトしていく子どもさんの数がものすごいと聞いていますよ。失望しちゃうわけですよ。それで、お母ちゃんもそうになってしまうと。そこに本当に手を差し伸べていくと、納税者の期待から、「そりゃ使っちゃー」となると思いますよ。そういう風にやっていきたいと思います。69歳でもうすぐ死にますので、名古屋の大プレゼント、子どもさんと親への。そうしたいと思っております。それと、おっかさんは夜、家に行かなければいかんね、これ、多分。悩んでいる場合、アウトリーチですが。誰が行ってやるかというのは大問題だもんで、まあしょっちゅう言っているけど、実は消防団じゃない消防署員ですけど、まあ名前は言ってくれるなと言っているけど、言わんでえーよと言ってるけど、命を救うという事は自分ら思っているんで、消防団もあるけどある消防署員は「行ってくりゃいいがや」という意見もある。ということでございまして、今日は色々聞きにくいこともあったと思いますが、次回へと、よろしくお願いします。ご苦労様でした。サンキューベリーマッチ。